

太田文夫といふ男

太田文夫（68歳）80年代のお笑いブームを作った売れっ子放送作家の一人。今は20年以上続くラジオのレギュラーと雑誌の連載ちょこちょこの悠々自適の生活。

太田明子（64歳）文夫の妻。

三井理（みついおさむ・32歳）文夫の弟子。10年目。

高梨理恵（たかなしりえ・30歳）文夫の弟子。4年目。

火村（ひむら・30歳）文夫の弟子。5年目。

種島（たねしま・48歳）芸人。文夫のラジオ番組のパートナー。

太田陸（28歳）文夫の息子

太田彩（26歳）文夫の娘

○とある高層ビル（31階）の会議室（夕方）。

年配の男性・文夫（ふみお・68歳）と対に男性・火村（ひむら・34歳）が座っている。文夫は白髪頭に洒落たシャツを着こなしている。足を組み、その足をゆらゆらさせながらタバコをくわえ原稿を読んでいる。対して日村は落ち着きなく文夫を見つめている。余裕がないのかペットボトルのお茶を何度も喉に流し込んでいる。

文夫「だめだね。これじゃお客様はついてこないよ。それどころか演者もね。」

文夫はそういうと原稿をそっと机に置いた。日村はがくりと肩を落とす。

文夫「丸々やり直し。今日中にね。」

火村「今日中って‥もう17時ですよ！？せめて前半部分だけでも‥」

文夫「その前半からお客様置いてきぼりなのに？冗談じゃないでしょう。」

文夫はそう言うと、タバコを漬し立ち上がる。うつむく日村をちらりと見遣り言葉を選んでいる。

文夫「一無理そなら三井に早めに言うように。」

文夫はそう言うとジャケットを羽織り中折れ帽を頭にのせ、会議室を出ていく。戸が閉まる音。残された日村は悔しそうに原稿を見つめている。

○銀座のとあるレストラン（夜）

薄暗い店内で文夫は妻（明子・64歳）と食事中。格式高いレストラン。明子は上品なワンピースを着ており華やか。二人は丸テーブルに向かいで座り、楽しそう。

明子「ねぇ文夫さん。1年前の今日はちょうど陸の結婚式の日なのよ。信じられない。あれからもう1年もたったなんて。」

文夫「もうそんなにたったか・・・。」

明子「あの日からほんっと色々なことがあったわね。言ってみましょうか。陸の結婚から始まって、彩の婚約があり、あなたの著書が出版されて、その発売日にあなたは倒れてそのまま入院、8時間もの心肺停止。奇跡の復活をしたと思ったら退院直後にお忍びデート。」

文夫「まあ、その話は・・・」

明子「結局、週刊誌に撮られて。もうこりごりかと思いきやまた違う女とデート、その間に朝子さん（陸の妻）が妊娠して、彩が駆け落ちして。それから私も私で今年は3回も入院してる。もうほんと毎日がスペシャル！な日々だったわ」

明子はケラケラと笑い、ワインを飲み干すとウエイターにアイコンタクトを送る。やってきたウエイターに注文を終えると、話はまた始まる。文夫はそんな明子の様子に慣れた様子。目を細めて渋面を作ったり、ワインをちびちびやっている。

明子「それに今年も色々なところに行つたわね。年明けのオーストラリアから始まって、函館、金沢、上海、熊本、スペイン、それから先月のお伊勢。」

文夫「伊勢は恒例になってきてるなあ。スペインは良かった。」

明子「ね、ふふ。私ね、どんなに忙しくても、どんなにやんちゃしても、きちんと落とし前をつけてくれるあなたがほんとに好きよ。」

文夫「なんだ、今日はやけに饒舌で機嫌がいいじゃないか。例の、あのボランティアが上手くいっているのか？」

明子「それもあるわ。一でもね、ここ最近よく思うの。あなたってほんとに強いって。」

文夫「強い？なんなんだよ今日は」

文夫は思わず吹き出す。ワインを飲み干し、牛ヒレを切ると口にほうばる。明子は慈悲の表情でそんな文夫を見つめる。

明子「この1年はほんとに色々なことがあったでしょ。心躍るようなことも沢山あったけれど、その何倍も辛いことがあった。でもその度にあなたは不死鳥のごとく立ち上がって、それを血肉に変えてみせたわ。」

文夫「・・・血肉ねえ」

明子「あなたは決してただでは起き上がらないもの。」

文夫「作家にとってサイマーはサイコーだからね。」

明子「喜びも悲しみも全てをネタに、ね。あなたの座右の銘。」

文夫「その通り。」

文夫はウエイターを呼ぶとワインを頼む。二人は顔を寄せ合う。周りは暗く、二人だけの世界に明かりが灯っているよう。

○文夫の自宅。高層マンションの高層階。（その夜）

文夫は寝室でジャケットを脱ぐ。部屋の明かりつけない。シャツの袖のボタンを外していると、後ろから明子が入ってくる気配。文夫は構わずボタンを外す。

明子「一お話があるの。」

文夫「ん？（笑いながら）まったく、君はお話の宝庫だな。」

文夫は身体ごと振り向く。明子はまっすぐ文夫を見つめている（ようにみえる）。廊下からの明かりが逆光で表情がみえない。

明子「－あなたと離婚したいの。」

文夫固まる。長い沈黙。文夫の背景には窓があり、夜の空に東京タワーが映えている。

文夫「－本当に言ってるのか？」

文夫の途方に暮れた表情。皺が深く刻まれ、目は優しく垂れている。歳相応の老いが伝わる。明子は口を抑え震えている。

○翌日。とあるビルの会議室。（午前）

10畳程の室内。テーブルをはさんで文夫と理が対に座っている。理の前にPCがあ
り、時々作業をしつつ文夫に近況を報告している。

理 「そうそう、高梨も構成の一人として担当している【雨合羽と晴れラッパ】が今度の
改变で時間繰りあげになるそうです。もう高梨泣いて大変でした。ほぼ初めてがつ
つり参加した番組みたいで。」

文夫 「ほおそうか。あの番組は確か岩田なんかも入っているはずだよな。骨太でいい番組
だよな。ああいう番組が受け入れられるって嬉しいよなあ。」

理 「そうですね。僕もあの世界観好きですねえ。」

文夫 「うーむ、しかし高梨は最近調子づいてるなあ。まあ何度もいけど放送作家は30
代が分かれ目だからな。存分に揉まれるといいさ」

文夫はちらりと腕時計を見る。

文夫 「火村は？連絡とっているの？」

理 「それが・・・あいつ最近おかしいんすよね。ラインすれば返事も来るし、現場で
もちよくちょく顔合わしてはいるんですけど。どこかよそよそしいというか、他人
行儀というか・・・。あ、もう11時か。文夫さんそろそろですよね。」

文夫「そうだな。まあ火村はちゃんとケアしてあげないと。頼むよ。」

文夫は机をコツコツたたくと、立ち上がる。

文夫「今度飯でも行こう、久しぶりに」

理 「はい、是非。」

文夫はジャケットを手に会議室を出ていく。

○赤坂・TVS ラジオ放送局。(昼)

ラジオブース内で、ヘッドホンを付けた文夫が男性（種島・48歳）と賑やかにお喋りをしている。生放送中。ガラス越しの映像。AD や作家も一緒に楽しそう。

種島「実は僕、このあとミッションがあって。というのも今日が妻の誕生日でしてね。子供たちと家でサプライズをしかけるんですよ。」

文夫「それは言っていいのかい？君の妻はよく聞いてくれているんだろう？この番組」

種島「お任せくださいよ、妻の友達に協力してもらって今頃ランチに行ってるはずなんで。」

文夫「なるほどね。で、君のいうサプライズってなんなの？たかが知れてんでしょ？」

種島 「ええ知れていますとも。伊勢丹で取り置きして貯めた財布を受け取って、デパ地下でケーキと総菜買って、ハンズで風船買ってハイ終わりですよ。そんなもんでしょうよ！」

文夫 「ははは、捻りも何にもないね。」

種島 「やっぱり文夫さんレベルになると奥さんの誕生日も盛大なんですかあ？」

種島は皮肉たっぷりに言う。一瞬の沈黙。

文夫 「そうだねえ、僕の場合はもう結婚当初から人気者だったからね。誕生日に一緒に過ごしたことも数える位しかなかったかなあ。もちろん毎年プレゼントは渡していたよ。それこそバッグも財布も捨てる程。・・でもそれだけじゃ足りなかつたのかもしれないね。」

文夫は寂しそうに笑う。

文夫 「それよりもっと一緒にいなきゃいけなかつたのかもしれないね。いやあ、君みたいなもんからでも学べるもんだね、搾りカスとはいえ」

種島 「なんすかそれ、誰がぼろ雑巾すかー」

種島の言葉に周りがどっと笑う。ガラス越しの映像。文夫も笑っている。

○文夫の自宅。高層マンションの高層階。リビング。(深夜)

文夫はソファに座りテレビを観ている。目の前のテーブルにはワイングラス。

文夫は立ち上がるとキッチンへ。しゃがむとシンクの下の扉を開ける。奥からガラスの灰皿を取り出す。

明子の言葉がフラッシュバック。

明子（声）「この家ではタバコは絶対よして。外では好きなようにしたらいいわ、でもここではやめて。」

文夫はソファに戻り灰皿をテーブルに置くとタバコを取り出す。火を点けてうますうにふかす。じっとテレビを見つめている。文夫の俯瞰。

○一週間後。とある居酒屋。（夜）

個室で文夫と理、高梨の3人。文夫の隣には理、対面には高梨が座っている。下座の席は空席だがおしぶりと取り皿が置いてある。テーブルの上はごちゃごちゃと食事が並んでいる。

理 「そういえば文夫さん、やっぱり僕はあの法則を今一度信じてなりません。」

文夫「なんだ？変な日本語喋りやがって」

理はだいぶお酒が進んでいるのか顔が赤く呂律も怪しい。

理 「あれですよ、芸能界それから水商売てのは左右対称の名前が売れるってゆう。」

高梨「何ですかそれ？」

理 「聞いたことないか？山田太一に舟木一夫、吉田羊に三谷幸喜、それから我らの太田文夫大先生。売れっ子はみんな左右対称なんだ。」

高梨「え、あれ、ほんとだほんとだ。」

高梨は指で漢字を書いて確かめると感嘆する。

高梨「でも、それだと私たちだめじゃないですかー」

すぐに高梨はむくれ顔に。

理 「それな。あーあ、改名でもすっかなーいっそ三井光にしようかしらー」

文夫はあきれ顔。ふと空席を見る。

文夫「火村は結局？連絡來てるのか？」

高梨「もうそろそろだと思うんですけど・・」

理 「あいつも最近忙しそうで。すいません、こんな日に遅刻してしまって。せっかく文夫さんがこんな機会作ってくれたのに」

文夫「何がこんな機会だ。大したことも話してないだろう」

数分後。火村がノックして入ってくる。

火村「遅れてすいませんでしたっ」

火村は帽子をとり頭を下げる。走ってきたのか、息が切れている。

理 「おう、来たか。」

文夫「まあ座りなさいよ。」

火村「いや、あ、あのこの勢いのまま言わせてくださいっ」

はあはあと息を切らしながら火村は叫ぶ。

理 「なんだ、どうしたんだよ」

火村「ふ、文夫さん・・俺いや僕、文夫さんの弟子や・・や・・辞めようと思ってますっ」

文夫は火村を見つめる。表情から感情は読み取れない。

高梨「火村？」

理 「火村・・・」

その時、ノックの音がして店員が入ってくる。異様な雰囲気に驚いた様子。

店員「あ、あのお連れ様のお飲み物を・・・」

理 「あ、じゃあビールで。いいよな、火村」

火村「はい・・」

店員はいそいそと出していく。

文夫「とりあえず座りなさいよ。ゆっくり聞こう。」

火村「はい・・」

火村は高梨の隣にいくと背負っていたリュックを椅子にかけ、座る。息がだいぶ落ち着いたよう。しばし沈黙。再びノック。店員がビールを火村の前に置くと、またいそいそと出していく。

文夫「火村、ずっと考えていたのか？」

火村「・・・ずっとって訳ではないです。ここ最近です。ぼ、僕の作りたいものと文夫さんの考え方と少しずれを感じ始めてて・・・」

高梨も理も黙って聞いている。

文夫「ーそうか。さぞ言いにくかったろう。」

文夫は笑う。火村が顔をあげる。

文夫「勢いつけないと言えないよなあ。」

火村は再び下を向く。鼻をすする。再び沈黙が流れる。文夫はゆっくりビールを飲む。真似するように理も飲む。

文夫「一でもまあ辞めるも何も、契約結んでる訳もあるまいし。好きにしたらいいのに。」

火村「そんな」

文夫「律儀な奴だな。ふらりと消えたらいいものを。」

火村の目はみるみる涙で溢れる。

文夫「お前のそういうところ悪くないよ。」

文夫は優しく笑う。ずっと下を向いていた高梨はおしぶりで涙をぬぐうと、そのおしぶりを火村に投げつける。火村からは嗚咽が漏れている。理もおしぶりを火村に投げつける。

文夫「しかし立て続けだなあ。なんの因果か」

文夫がつぶやく。

理 「立て続け？」

文夫「明子も出ていったんだ。先月。」

高梨「ええ！？あの奥さんが？！」

理 「え！？なんでですか！？だってあんなに・・」

文夫「あんなに仲良かった夫婦でも壊れるときはあっけないもんさ。」

高梨「信じられない・・・」

文夫「うーん、でもなんというか・・俺たちの場合は砂時計みたいにさらさらとゼロに近づいていた感じがするな。ひたひたと結果に近づくような」

火村「そんなあ・・」

理 「り、理由とか聞いていいんですか・・？」

文夫「明子に好きな人が出来た」

高梨「・・信じられない・・」

文夫「まあそれが全てじゃないだろうけど。でも結果は変わらない。明子は出ていったし、俺は一人だし、そして火村も去っていく」

火村「・・なんかすいません」

理 「この野郎っ」

理は文夫のおしぶりも火村に投げる。

文夫 「でも火村も明子も偉いよなあ。」

3人 「・・・？」

文夫 「だってそうだろう。自分で考えて、自分で決めて、自分で動いたんだ。大したものだよ。流れに身を任すのは単なる思考停止に過ぎないからな。」

文夫は店員を呼ぶとやってきた店員にワインをボトルで頼む。他の3人も色々頼みた
だし、ぐっと賑やかになる。

文夫 「カンパイ」

4人のグラスがぶつかる。笑いと涙の宴が始まる。

○帰り道。(深夜)

あちらこちらで飲み会帰りの会社員が溢れている。火村が大通りに出てタクシーを
一台捕まえる。

文夫 「ありがとう。」

火村 「文夫さん・・あの、本当に、その、ずっと、ありがとうございましたっ」

文夫「ああ。まあ狭い業界だ、世話になることもあるだろう。元気で。」

火村「‥‥はいっ」

涙ぐむ火村を理がどついている。

文夫「じゃあ。よろしく。」

文夫がタクシーに乗り込む。その時、ふわりと高梨もタクシー駆け寄る。

高梨「方向一緒なんです。私も一緒にいいですか？」

文夫「ー構わないよ。」

タクシーは走り去る。残された理と火村はあっけにとられている。

○タクシー車内。

文夫はじっと外の景色を眺めている。その横顔を高梨が心配そうに見つめている。

高梨「‥‥文夫さん、反省とか後悔とかやめてくださいね？文夫さんらしくない‥‥」

文夫「ん？はは、まさか。」

高梨「・・明子さん、好きな人できたそうですけど・・ホントよっぽど死ぬほど好きになっちゃたんですね、きっと」

文夫「・・どうしてそう思う？」

高梨「・・だって、文夫さんと別れる位ですもん。文夫さんですよ？・・いつも仕事優先で家族なんて二の次ですし、浮気なんて朝飯前じゃないですか。タケシさんをはじめつるんでる芸人さんていかにも品がないですし・・そのくせ病氣して倒れちゃうし。文夫さんて実はなんか色々だめじゃないですか人として。」

タクシーが信号で止まる。夜の東京の街は煌びやかで騒々しい。

高梨「それでもずぅーっと明子さんて文夫さんから離れなくて、一番側にいて支えてて。ああ私はこの人は文夫さんを支えるのが生きがいなんだなって思ってましたもん。世間の評価とは裏腹に、だらしなくて寂しがり屋の文夫さんを支えるのが。」

文夫「・・・」

高梨「それが、好きな人が出来たから別れるって。もう、潔いですよね。天晴です。」
文夫「・・しかしあれだね、切り替えた後の女の冷たさよ。痺れたねえ。」

高梨「アハハ、痺れたんですか。散々振り回したツケですよ。それでも、私は応援したくなります、明子さん。なんだか素敵です。」

文夫「君は明子が好きだったからね。まあでも私も嫌いにはなれないし、今でも感謝してるよ、彼女には。何かあれば相談に乗るだろうしね。」

高梨「ああやっぱり文夫さんはそれくらい遅しくいてくれないと困ります。」

文夫「—それにね、僕はこれを必ずしも不幸とは捉えてないしね。これからまた違う女の人と恋愛に落ちるかもしれない。それも堂々と。」

高梨「ふふふ。」

文夫の茶目っ気ある表情に高梨は思わず笑みがこぼれる。

文夫「明子にしたって、火村にしたって、出会えば別れは来ただろう、遅かれ早かれ。」

高梨「会者定離。野ざらしでもでてきますね。」

文夫「そうだね、好きな言葉の一つだ。」

高梨のマンションが見えてきた。

文夫「まあさ、この哀しさとかおかしさもきっと作品に活きるから。高梨も元気出せよ、別れをいつまでも引きずるな」

高梨「・・・えっ！なんで知ってるんですか、別れたこと。誰にも言ってないのに・・！」

文夫「気づかない方が無理だよ。覇気がなくて、スマホばっかり見やがって、集中しろ集中。理も火村もみーんな言ってたぞ」

高梨「・・・う、すみません・・」

文夫「さてこの別れがどう生きてくるのか、楽しみにしてるよ、高梨」

高梨「・・はい、ありがとうございます・・・。というか、こっちのセリフです、文夫さん。」

文夫「ハハハ」

高梨の言葉に文夫は不敵に笑っている。

○5年後。とある病院の個室（昼すぎ）。

再び入院した文夫が病室でカタカタと PC を叩いている。軽いキッキンがあり、そこで 50 代後半位の上品な女性が果物（メロン）を切っている。PC の音と包丁の切る音が心地よく響いている。そこに、理が見舞いにやってくる。

理 「ちわっす。って、文夫さんまた、仕事して・・少しばじつとしててくださいよ。
一応病人なんですから・・」

理は女性に会釈し果物を渡す。女性も会釈し受け取る。

文夫「もう終わる」

文夫はちらりと理を見ると、空返事。そんな文夫に理は女性と顔を見合わせて笑う。文夫のベットの横に椅子を持ってくると座り、文夫の作業が終わるのをじっと待っている。女性は再びメロンを切り出す。

理の後ろに見える空は真っ青で雲一つない。風がカーテンを揺らしている。